

## 戦争遺跡をまちづくりに活かす

1995年、広島原爆ドームがユネスコの世界遺産に登録されるようになると、日本の文化庁でも、戦争遺跡を文化財として認めるようになった。

館山では一般公開となった「館山海軍航空隊赤山地下壕跡」は、日米開戦前から掘られていたという重要な証言がある。内部には、発電所や兵器格納庫のほか、奉安殿（ほうあんてん）や病院などの施設があった。平和学習だけでなく、壁面には隆起や断層などの立体的な地層が見られ、総合学習の場といえる。

市内には戦闘機を格納する掩体壕（えんたいごう）をはじめ、「戦闘指揮所」「作戦室」という額や龍のレリーフが残る地下壕など、全国にも重要と認められた戦争遺跡が、未整備のまま多数点在する。館山市では、戦争遺跡を組み入れた都市づくりの目標像として「地域まるごとオープンエアミュージアム、館山歴史公園都市」構想を掲げている。



掩体壕



赤山地下壕跡（館山市指定文化財）



龍のレリーフと「戦闘指揮所」の額がある「128高地」地下壕（1944年）

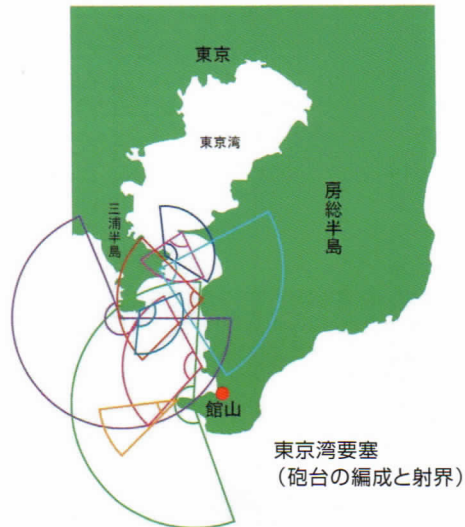
戦後60年には、館山の戦争遺跡を舞台に、平和祈念映画『赤い鯨と白い蛇』が制作されました。

## 戦争遺跡は平和の語り部

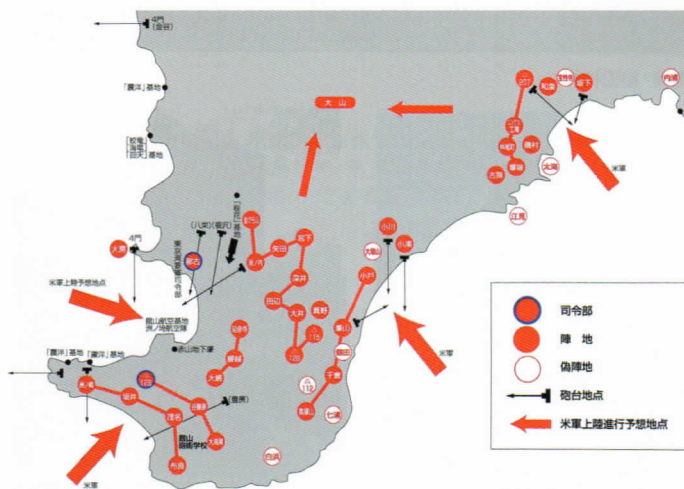
東京湾入口の館山は、幕末から台場が設置され、明治以降は東京湾要塞に位置づけられた。関東大震災で隆起した海を埋め立てて、1930年に「館山海軍航空隊」が開かれた。空母パイロットや落下傘部隊の実戦訓練の基地となり、中国重慶やハワイ真珠湾をはじめ、南方の島々への奇襲攻撃を成功させている。

戦争末期になると、安房は本土決戦体制となり、人間魚雷「回天」や特攻艇「震洋」、人間ロケット「桜花」などの特攻基地が次々と作られた。7万人の兵士が送り込まれ、農家には花作り禁止令が出されて、花畑は芋畑に変えられた。苗や種は焼き捨てられたが、花を愛する農民はひそかに抵抗し、こっそりと種や球根を隠し残した。

子どもたちもまた、夜間戦に備えた軍用物資としてウミホタル採取を命じられた。戦争が終わると、再び花作りが始められた。これらの実話は小説や音楽物語などに描かれ、今に語り継がれている。



弾薬庫



安房の「本土決戦」配備計画(1945年)

